Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo

広島大学　グローバルインターンシッププログラム

NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム（G.ecboプログラム）
―10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ―

2021年3月　　第20号 Vol.13 No.1

目次:

COVID-19流行下における G.ecboプログラムの対応	1
COVID-19流行下における G.ecboプログラムの対応（続） 国別COVID-19感染者数グラフ	2
2019年度派遣学生レポート	3
2018年度派遣学生レポート 2017年度派遣学生レポート	4
就職活動レポート	5
世界に広がる派遣先 紹介＆メッセージ	6-7
世界で，日本で活躍するOB，OG	8-10
2019年度冬期派遣生帰国報告会 2020年度RA紹介	11
G.ecbo ヒヤリ･ハット･･･！ 事務局編集後記	12

COVID-19流行下におけるG.ecboプログラムの対応

MAHARJAN, Keshav Lall 教授

大学院人間社会科学研究科教授
大学院国際協力研究科教授
G.ecboプログラム運営委員長

2020年はnovel（ノベル:新型)コロナウイルスで明け，**Co**rona **Vi**rus **D**isease 20**19** (COVID-19:コビッド19)で暮れた年となった。2019年の終わりのころ，中国武漢市や横浜港に停泊中の船で特定できないウイルス感染による重傷者が多く出ているニュースが飛びこんできた。その後，原因はどうやら新型コロナウイルスであることが明らかになった。以前のウイルス感染と同様にこのウイルスも動物から人間に感染した可能性がある。感染しても，症状が出ない人もいれば，高熱，味覚，嗅覚障害，呼吸が困難になる等の厳しい症状で苦しむ人もいる。感染力がすごい。有効な治療薬もなくワクチンもない。あっという間に全世界的に広がり，特に高齢者，他の病気を持つ患者等，抵抗力が弱っている人に感染したら重症化する率は高く，死に至ることもある。このような状況下，G.ecboプログラムでは，派遣する学生の安全性を確保することを重視していることから，2020年3月，2019年度第2回運営委員会で，2020年度前半の海外インターンシップ派遣活動を中止することを決めた。

ことの重大性を考慮し，WHOはこのノベルコロナウイルスによる感染症をCOVID-19と名付け，pandemic（パンデミック:複数の国にわたって深刻な被害を起こす病気が流行している)な緊急事態であると宣言し，注意を促し，感染防止のため，適切な対策をとるように指針を打ち出した。このウイルスは呼吸器官に感染すること，接触や飛沫感染でうつってしまうことから，3密（密閉，密集，密接な場所）を避けること，social distance（ソーシャルディスタンス:社会的距離）を取ること，マスクを付けること，頻繁に入念な手洗いすること，徹底した消毒を行うこと等が，重要な感染防止対策であるとしている。

その後，世界中の多くの国々ではCOVID-19の感染を抑制するために，lock down（ロックダウン:外出禁止;都市封鎖）等を実施した。これによって国際的移動･渡航は一時的にできなくなった。このような状況下，本学における内外からの多くの学生･新入生の来学は難しくなっただけではなく，卒業･修了生の留学生は帰国することができず翻弄された。

（2頁へ➡）

G.ecbo海外インターンシッププログラムとは？

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して，既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出，国際協力･国際援助の第一線をリードする実務者の養成と，世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

COVID-19流行下におけるG.ecboプログラムの対応

（1頁より）

そして本学では，2020年度の全て授業を基本的にオンライン・オンデマンドで実施することになった。しかしながらこの方針は，あらゆる境を越境し，現場に入り込み，問題解決型方法で現場のニーズを把握し，学び，多分野的に対応することを主目的とする本プログラムの実施においては，充分な条件ではない。

COVID-19との付き合い方においてhammer and dance（ハンマーとダンス）という考え方がある。つまり，先ずは強力なハンマー（ロックダウン，感染者の強制的隔離，接触先の追跡，積極的な検査等）でコロナウイルスを押さえこむこと，その後は日常生活に戻り，ゆるやかに社会的距離を取り，with corona（コロナと共に）「ダンス」＝日常生活を続けるという考え方である。日本において第1波の感染は，緊急事態宣言による不要不急な外出の自粛等のハンマーで押さえ，第2波の時，感染状況はある程度落ち着いたため，ハンマーによる押さえつけを緩めながらGo to…キャンペーンに代表されるように日常生活・社会経済活動が戻るような政策等が実施された。本学においても，「新型コロナウイルス感染拡大防止のための広島大学の行動指針」がレベル1.5（要注意，一定程度の活動制限）から，レベル1（要注意，一部の活動制限）に変更された。このままいけば対面授業もできるようになる期待もあった。しかし，本プログラムの主要な活動は海外インターンシップなので，派遣先国・地域をはじめとする世界中のCOVID-19状況を考えると，やはり安全面の観点から派遣は躊躇せざるを得なかった。2020年度第1回運営委員会で，今年度の後期の派遣も中止することとした。

以上のように，2020年度は海外インターンシップによる学生派遣がなかったので本プログラムの活動はかなり縮小した。このような状況でも派遣先との連絡が途絶えることなく，またこの非常事態の状況・対応を共有し合うために，派遣先の方々からメッセージをいただき，本ニューズレターに掲載することとした。また，本プログラムのOB/OGの現況を把握し伝えることが，お互いに励みあい，学びあうきっかけになることも重要であることから，多くのOG/OBより近況報告を集めることにした。

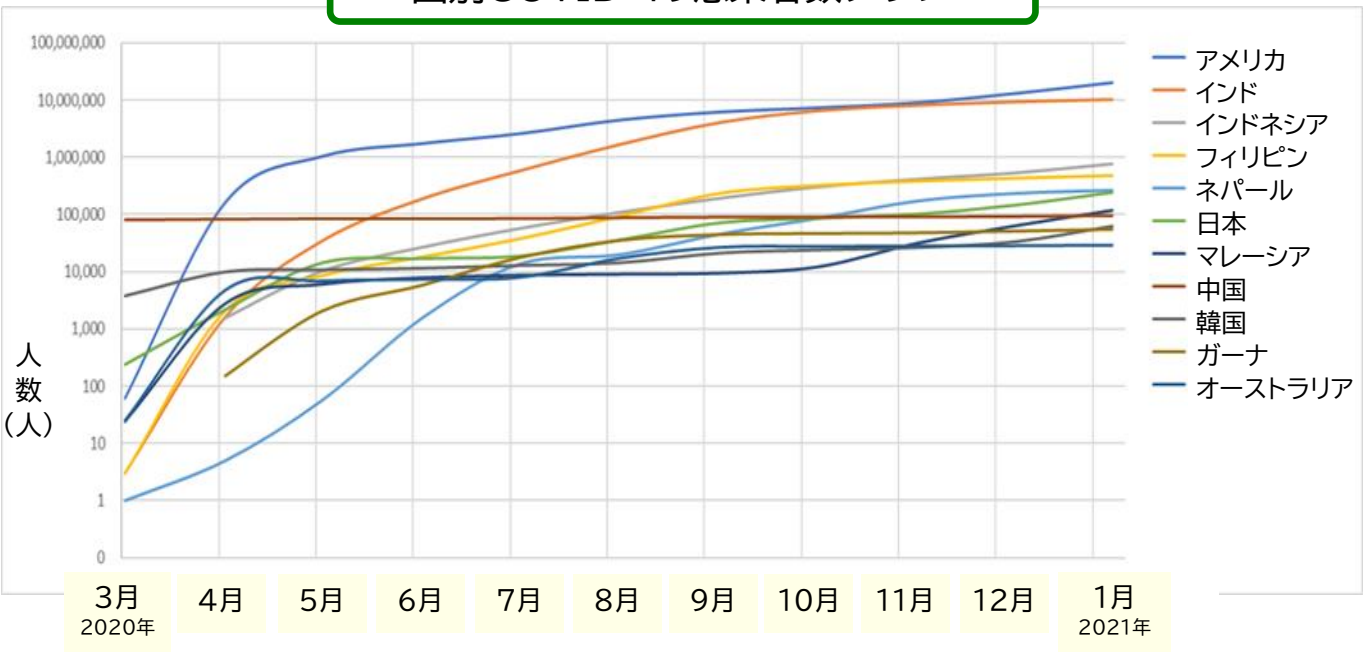
SGU,RUである本学が，世界トップ100大学となるために掲げている目標を，国際化の観点から，本プログラムが何らかの足しにできればと思う次第である。日本は目下第3波の感染状況下にあり，コロナを押さえるには色々なハンマーが必要になるだろう。変異種も増えウイルスが感染力を増していることなどから,日本でも世界でも感染者数はさらに増加し高止まりになっている（下表参照）。世界では2回目のハンマーとして再度都市封鎖されたところもあれば,日本では11都府県において緊急事態宣言が発出された。本学の行動指針のレベルも上げられ,再び授業は基本的に非対面式で行うことになっている。コロナと共にダンスできる日常になれば本プログラムにおける海外派遣活動を直ぐに再開し，フル活動できるような状況を整えておきたい。その一環として本プログラムの過去の実績などを整理し今後の計画に活用できるようにしたい。

ワクチン開発も急ピッチで進んでおり一部では接種も始まっている。人類は近い将来にこの「化け物」に勝つことは間違いないと信じている。その時まで皆さん，安全でいるように，健康でいるように。お大事に。

Stay safe, stay healthy, which is most important in our life.

G.ecboプログラム運営委員長
マハラジャン・ケシャブ・ラル

国別COVID-19感染者数グラフ



※ WHOのデータより，8月までは1日の，9月以降は1週目のデータを抽出

2019年度派遣学生レポート

竹本　佑　TAKEMOTO　Yu（工学研究科）

Host	SATVEN (Satyam Venture Engineering Service Pvt. Ltd)（インド）
Period	2019年9月2日～9月22日
Objectives	衝突・構造解析ソフトウェアを使用した自動車部品の破壊シミュレーションの精度向上と，複合材料の製造・応用に関する技術的な情報共有

本プログラムにおいて私は，共同研究の一環としてLS-DYNAと呼ばれる衝突・構造解析ソフトウェアを使用した自動車部品の破壊シミュレーションと，LS-DYNAを使用するために必要なソフトウェアについての技術の習得，研究・開発に関する情報共有を行った。これらの活動の目的としては，複合材料を自動車部品に応用するための技術共有と構造解析技術の向上がある。研修機関であるSATVENは，自動車関連の設計・開発サービスを行う企業であり，本実習ではテランガナ州ハイデラバードにある本社を訪問した。プログラムの中で，研究背景を共有し，解析ソフトウェアを用いた自動車部品の形状の検討を行い，帰国後の共同研究を円滑に行うためのアイデアを得ることができた。休暇には，インドにおける交通事情や日常生活の一端を垣間見て，日本とは異なる文化・価値観に触れた。この経験が自身の研究だけでなく人生観にも厚みを与えたと振り返る。派遣機関のSATVENにおいては，現地滞在における様々なサポートを行っていただき非常に心強く感じた。また広島大学の先生方においては，このチャンスを下さり，根気強くご指導いただいたことに深く御礼申し上げる。

MOHAMMAD ROBIUL AWAL KHONDAKER（国際協力研究科）

Host	FORWARD (Forum for Rural Welfare and Agricultural Reform for Development)（ネパール）
Period	2020年3月6日～3月22日
Objectives	To learn about food and nutrition security, firm forestry, biodiversity conservation, rural sanitation in Nepal and organizational behavior of government-non government approach.

（一口レポートより抜粋掲載）– *From 1st Weekly Report on March 16th, 2020*

2020/03/11(Wednesday)
On that day, I visited a day care center nearby FORWARD office which is run by Rotact club of Bhratpur. It is a center of 40 children between 2 to 4 years of poor family. They are given daily meals from here without any cost.
2020/03/12(Thursday)
I visited a sanitation program run by RRN(Rural Reconstration Nepal) which is 12 Km from FORWARD office. It is a WASH (Water, Sanitation and hygiene) program. They provide materials for toilet making to the poor households at free of cost. I collected some data about this program
2020/03/13(Friday)
Today I went to the day care center at 10 AM. Only 16 children were there in this morning. I measured their weight (kg), hight(cm), date of birth for nutritional assessment. I also took their previous data of 6 months from their record. I will study their changes on nutritional level.

田口　大志　TAGUCHI　Taishi（国際協力研究科）

Host	NTC インターナショナル株式会社（コートジボワール）
Period	2020年2月26日～3月19日
Objectives	クレジットシステム関連業務及び，プロジェクト完了・引継に向けた業務補助

本インターンシッププログラムでは，西アフリカのコートジボワールにて開発コンサルティング企業の実施しているプロジェクトに参加しました。この派遣を通して，学んだことは，特にチームで仕事をすること，コミュニケーションの難しさ，ロジステック業務の重要性の3つです。日本人とコートジボワール人からなるプロジェクトメンバーに加わりました。プロジェクトを前進させるために細かなやり取りが大切でした。特に，時間に対する感覚が全く違うため，何度も確認するなど，細部まで気を使う必要性を感じました。また，現地にチームメンバー全員が滞在しているわけではないため，必然的にメールでのやり取りが多くなります。そうすると，相手に状況を正確に伝えるための文章力も必要でした。プロジェクトにおける，ヒト・モノ・カネの手配の重要性も，金銭や領収書のやり取りの中から学び取ることができました。インターンシップを通して，開発コンサルティング企業の仕事に就いての理解が深まり，この機会を提供してくださった様々な関係者の方々に，この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

2018年度派遣学生レポート

深谷　康佳　FUKAYA Yasuka（文学研究科）※遡上プログラム

Host	Sina Rang Lemulung Homestay（マレーシア）
Period	2019年3月12日～4月5日
Objectives	消滅の危機に瀕した言語ケラビット語の文法記述のための言語調査

私は2018年度のインターンシップにおいて，マレーシア，オーストロネシア語族のケラビット語の詩や文法事項に関する調査を行いながら，ホームステイの運営等を手伝い，外部の人と現地の人との間の橋渡し役を務めました。また，第1回目の「先住民族サステナブル・フォーラム」において，類型論的な観点からのケラビット語の特徴について発表を行いました。本インターンシップの経緯としては，2015年度にG.ecbo海外インターンシッププログラムに参加し，bahasa Melayu（ムラユ）語圏であるインドネシア教育大学でインドネシア・スンダ語と日本語教育の基礎を学びました。その経験を活かし2018年度のG.ecbo遡上プログラムでは，同系統の言語が用いられているバリオ村（マレーシア）に滞在し言語の調査を行い，日本語教師として活動しました。その中で新しい言語コンサルタントと出会いました。彼の協力により，渡航調査を行うことが困難な状況下でもオンライン調査が可能となりました。今後の目標としては，調査で収集した表現を元にして，ケラビット語の包括的な文法記述を進めていきたいと考えています。このような出会いをもたらしてくださったG.ecboプログラムに関わる全ての方に感謝を申し上げます。

2017年度派遣学生レポート

陳　麗蘭　LILAN　CHEN（教育学研究科）

Host	Florida State University（アメリカ）
Period	2018年1月10日～2月12日
Objectives	To learn more about the higher education system and the status quo of international faculty in the universities of America.

Finally, I got the chance to talk to Prof. Shouping Hu this week, who is the Louis W. and Elizabeth N. Bender Endowed Professor of Higher Education (HE) and the founding director of the Center for Post-secondary Success (CPS). He has quite many lectures for graduate students, such as HE Finance, International Perspectives in HE, Research on College Students, and Student Success in College. All of those are quite close to my specialty-HE. And also, since my research interest is about internationalization, specifically international faculty. So his experiences of working and living in America are greatly related to my research hypothesis. So we made a 2-hour meeting on 31st, discussed the HE system and challenges of international faculty in the HE institutions of China, America, and Japan. Thanks to him, I got to know more about the situation of HE and international faculty in the universities of America. In the end, he introduced some journals, articles, and famous researchers to me which helps me a lot with my professional development. It's really a fantastic opportunity to talk to Prof. Shouping Hu, he inspired me a lot not just the general knowledge about the systems, but also his professional and sharp mind in HE field. In order to become a more capable researcher like him, I suppose we should always move forward. *-From 4th Weekly Report on February 11th, 2018.*

Huang Qiong　（国際協力研究科）

Host	Florida State University (アメリカ)
Period	2018年1月10日～2月24日
Objectives	Completing the internship, attending PIE program and learning about the TA system

The first week, I attended the orientation of PIE program which is a very important part of this internship. The orientation covered a few topics: 'Jump start your semester', 'professionalism and communicating with your students', 'Canvas essentials', 'providing student feedback: grading concerns & practices', 'university teaching policy panel: academic honor policy, FERPA, ADA and sexual harassment'. During the second week, I attended some meetings, including about the FSU GradWorld Project meeting, the monthly TA associate meeting and also met with Dr. Maria Mendoza who is teaching international TAs. We talked about international TA trainings and FSU TA trainings and requirements. The third week, I attended TA workshop, joined some classes and attended the research seminar held by Dr. Lisa who is the director of the graduate school PIE training program which was very inspiring and meaningful. In the later weeks, I also attended some other seminars and classes about economics, toured around the campus, went to the library to study, join some after school activities. Overall, this internship is very fruitful and I learned a lot through seminars, meeting and communicating. Thanks to G.ecbo for offering such a fantastic opportunity to make this internship successful. Also highly thankful to Dr. Lisa Liseno and Prof. Ella-Mae Daniel who accepted us and helped a lot during this period in FSU. Also thanks to my supervisor's approval and support to make this trip happen. Thanks to the students in FSU who showed me around campus and also offered a lot of help to us.

就職活動レポート

角　惇平　SUMI　Jumpei（国際協力研究科　開発科学専攻）

広島市役所(建築職)内定

2019年度　Research Institute for Housing and Human Settlements, Ministry of Public Works (PUSKIM) in Bandung, Indonesia(インドネシア)派遣

住宅研究所にて

－この業界を選んだ理由

私の夢である建築という分野で，社会に貢献できるからです。小さな頃テレビで放映されていた「大改造劇的ビフォーアフター」を観て建築家に憧れるようになり，広島大学の建築科に進学しました。広島という地で丹下健三さんが設計された平和記念公園を訪れて，建築が都市や社会に与える影響の大きさに感動しました。その場所に生きる人の思いと社会を繋ぎ，見える化する建築というものをより深く知りたくて，アジア建築都市環境研究室へ進学し，行政としての建築の多様さと重要性を実感しました。この仕事ならやりがいをもって取り組めるというのが，選んだ決め手となりました。

Pasteur区役所の皆さんと区役所にて

写真提供:広島県

－インターンシップ経験が就職活動に与えた影響

私はPUSKIMと呼ばれるインドネシア政府の住宅研究機関にインターン生としてお世話になりました。現地では都市型密集住宅の空気質の実測を行いました。初めて自らが主体となったのですが，実測をする中での優先順位をあらかじめ決めておくことで，アクシデントをなんとか対処し，実測を成功させることが出来ました。何事にも優先順位を決めておくことの重要性を学び，今後の人生で自分が何をしたいのか考えるきっかけになりました。また実測の中で現地住民の生の声を聴き，行政に対する期待を肌で感じました。こうした体験が，市民の意見がより直接届く市役所という職を選ぶきっかけになりました。

村長ご夫婦と村長宅にて

－今後の目標

就職したからといって立ち止まるのではなく，自分のできることには全力で取り組み，新たに学びながら日々自分をアップデートしたいです。そして，仕事を通して人々を笑顔にしたいです。

－後輩へのアドバイス

最近では日本でも新卒一括採用という仕組みの見直しが進んでいます。とはいえ，出遅れるわけにいかないからと，皆同じタイミングで，なんとなく耳にしたことのある企業へのインターンに参加し，就職先を検討しているのが現状ではないでしょうか。やりたいことで迷っている方こそ，是非，不安や恐怖を少し捨てて，海外インターン(G.ecboプログラム)に参加してみてください。こんな働き方もあるんだと視野が広がりますし，自らが主体となって大きなプロジェクトに取り組むことで自分のやりたいこと，やりたくないことも明確になってゆくと思います。焦らずに挑戦していれば，人生何とかなります(笑)

世界に広がる派遣先　紹介＆メッセージ

①<IMAGINUS イマジナス>

イマジナス（フィリピン支部）はネグロス島で，サトウキビ農家の所得向上を目指して，現地の材料を用いた産品開発を行っています。村の女性と協力し，カバンやアクセサリーなどの産品を製作し販売しています。また，同時に学校へ通うことが困難な小学生へ奨学金事業を実施しております。日本全国の学生インターンが現地で，或いはオンラインで現地スタッフと協働し，ネグロス島の人々の長期的な生活の安定を模索しています。

【派遣実績】2019年度2名(フィリピン)，2018年度1名，2017年度1名(インド)

⑦<NPO法人 ピースウィンズ・ジャパン>

Peace Winds Japan (PWJ) is an international humanitarian non-governmental organization (NGO) dedicated to the support of people in distress, and threatened by conflict, poverty, or other humanitarian crises.

With its headquarters in the town of Jinsekikogen, Hiroshima Prefecture, PWJ has been active in 33 countries and regions around the world. We also focus on activities aimed at solving social problems in Japan, such as community revitalization and activities aimed at eliminating the killing of dogs and cats.

We will continue to provide the necessary support to people in need.

広島県神石高原町に本部を置きこれまで世界33か国の国と地域で活動をしてきた国際協力NGO

②<インドネシア教育大学　ヌリア ハリスティアニ 先生>（インドネシア）

Universitas Pendidikan Indonesia (UPI)は，インドネシアのバンドンという地域にあり，自然，歴史と伝統文化に恵まれています。ここでの活動は主に日本に興味を持っているインドネシア人学生に日本の言語・文化・歴史などを教えることです。そのため，自分の文化を伝える経験だけではなく，インドネシア，特にイスラム文化やスンダ民族の文化についても体験ができ，充実した留学生活ができると思います。ぜひUPIにお越しください。

【派遣実績】2017度1名，2016度2名，2015年度1名

「研修先は，量子力学という分野について世界中から研究者が集まり様々な角度から研究を行っています。」（インターンシップ学生の帰国レポートより抜粋）

③< FORWARD Nepal　Netra Pratap Sen Executive Director >（ネパール）

The FORWARD Nepal is a non-profit non-governmental organization (NGO) established in 1997 under the act of Government of Nepal. The organization aims at reducing poverty of marginalized rural communities through sustainable development interventions. FORWARD's activities are focused on food/nutrition security, household incomes and resource conservations for sustainable livelihoods. It integrates agriculture, livestock, fisheries/aquaculture, farm-forestry, biodiversity conservation, value chain and market development in a multi-stakeholder approach with government, NGOs and private sectors at national and local levels. As cross-cutting themes, gender equality, social inclusion, social mobilization, and economic empowerment are prioritized. FORWARD Nepal is proud of its linkage with Hiroshima University (HU), through the engagement of interns from the G.ecbo program. Such collaboration has created an avenue for cultural exchanges, information sharing, and field exposures. The program has facilitated valuable relationships among HU, FORWARD and the students beyond the institutional level.

Prof. K L Maharjan with Chairperson and Executive Director, FORWARD Nepal in Chitwan

【派遣実績】　2019年度1名，2018年度2名，2017年度1名，2015年度1名，2013年度1名、2012年度2名，2010年度1名，2009年度3名，2008年度1名

④<グリフィス大学　量子動力学センター　Pryde 教授>（オーストラリア）

The Quantum Optics and Information Laboratory—at Griffith University in Brisbane, Australia—is a leading research team in the area of optical quantum information science. The QOIL team uses photons—single particles of light—to investigate the fundamental quantum properties of the world, and seeks to put them to use in future information technology advances. In particular, the research group has developed state of the art photon sources, using these to demonstrate novel high-fidelity amplifiers for quantum signals, precision measurements using quantum entanglement, and to show that information encoded into photons can give an advantage in computing and information transfer.

【派遣実績】2018年度1名，2016年度1名，2014年度1名，2012年度1名

⑤<韓国教員大学　李 智源 先生　広島大学韓国センター（G.ecbo担当）>（韓国）

韓国教員大学は，広島大学の協定校として，G.ecboプログラムでの受入れも行っています。これまで４人の学生がプログラムに参加しました。

全員，夏休みの間の1か月間，韓国教員大学に滞在し，研究を始め，韓国国内の学会に参加，発表を行ったり，研究室の人たちと旅行をしたりと，充実した期間を過ごしていたようです。韓国教員大学は幼児教育から，初等・中等・高等と教育を中心とした大学ですが，基礎学問も研究していますので，専攻に関わらず，韓国や韓国の文化に興味のある方々の参加をお待ちしています。

【派遣実績】2017年度1名，2014年度3名

⑥<フロリダ州立大学　Lisa Liseno教授>（アメリカ）　PIE Program：https://pie.fsu.edu/

The Program for Instructional Excellence (PIE), a unit of The Graduate School at Florida State University (FSU) in Tallahassee, Florida, USA, strives to enrich the learning experience for undergraduate students at FSU by supporting the teaching efforts of graduate student teaching assistants through its various services. PIE offers professional development programs that offer collaboration and community among all graduate student teaching assistants, and any graduate student interested in learning about best practices in teaching and learning. Programs include teaching workshops, teaching conferences, reading groups, peer teaching observations, teaching awards, and peer teaching office hours.

【派遣実績】2018年度1名，2017年度4名，2016年度1名，2014年度1名，2013年度2名，2012年度2名

世界で, 日本で活躍するOB, OG

Piya Luni さん ／ 広島大学人間社会学研究科 研究員

2008年度 FORWARD Nepal 2009年度 遡上プログラム FORWARD Nepal（ネパール） 2009年度 株式会社サタケ(日本) 派遣／国際協力研究科(教育文化) 修了

Tropentag Conference 2019 at Kassel University, Germany

－近況, 現在の仕事について

I hold part-time positions as a researcher at Hiroshima University and a research assistant at the National Agriculture and Food Research Organization (NARO), Grape-Persimmon Research Unit.

－G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面や局面について

I had the opportunities to participate in internships within Japan as well as abroad. I did my domestic internship at SATAKE, which felt more like an international internship as a non-Japanese participant. My internship abroad was conducted at FORWARD Nepal. This internship, in turn, felt more like a domestic one because Nepal is my home country. I chose Nepal so that my internship could be integrated with my thesis research. However looking back at it now, I feel like I missed the opportunity to visit a new country.

The internship at SATAKE was a valuable opportunity to experience the Japanese working culture. I learned about unique Japanese features like the Radio-Taiso and mini-meeting every morning before starting off the day's work. The chimes that rang to announce the start and the end of office time, tea breaks, and lunch break indicated the importance of time-management in Japan. The major takeaway from this internship was the daily pre-planning and punctuality that I take to heart till this day. In addition, I could learn about the world-class technologies related to rice milling and cooking.

The internship in Nepal was very important for my professional growth. I was the major actor, right from establishing the MoU between Gecbo and FORWARD to planning and executing my internship. I am very grateful to FORWARD Nepal for providing the logistic supports and facilitating to hire research assistants during the internship period. They also provided a platform to present my research findings with representatives from the local governments, University, NGOs, INGOs, and the community. This experience of a research project is the key professional achievement that I still utilize. I also collaborated with FORWARD for PhD research and recently for my project funded by the JSPS Grants-in-aid for scientific researches.

－自分の中に残り根付いていると感じるもの, さらに発展していると感じるもの

Since Nepal is the country where I grew up, everything there is familiar to me. I can't think of anything as a big impression. I do have some unique experiences from the internship at SATAKE. As a foreigner, it somewhat felt like I was back to high-school with the daily morning exercise (the Radio-Taiso) and the timely chimes indicating work-times and breaks. However, that was a very important reminder of the importance of being fit, mentally and physically, to start a long and tiresome work-day. The aspect of time management was equally impressive. I still follow the practice of incorporating regular breaks in between works and believe that improves the work efficiency.

Internship activity at SATAKE in 2009

Fun in Nepal with co-interns from China and Kyrgyzstan

－後輩へのアドバイス

I advise the new interns to take the internship opportunities at Gecbo for exploring new societies in a new country. Please plan your internship so that you can contribute professionally to the host institution, no matter how small. Finally, maintain the professional and personal relationships established during the internship. The networks will come handy in the future.

世界で，日本で活躍するOB，OG

松井　理恵 さん　MATSUI Rie　／　広島大学職員

2016年度　インドネシア教育大学（インドネシア）　派遣

国際協力研究科（教育文化）　修了

広島大学職員グローバル人材育成研修
（ワシントンDCにて）

－近況，現在の仕事について

私は国際協力研究科を修了後，広島大学の職員として働くことになりました。 採用されてから現在まで，工学部の支援室にて学部生の学生支援にあたっています。その中でも，私は入試の担当をしています。入試業務は，ミスの許されない責任ある業務となるため，時にプレッシャーを感じることもありますが，周りの方々に助けられながら楽しく仕事をしています。

－インターンシップから現在までを振り返って

修士論文の研究テーマが，日本で生活するイスラーム教徒の子どもたちに関することだったので，インドネシア滞在中には，派遣先の先生方が現地のイスラーム系の学校や，近所のモスクに連れて行ってくださいました。ムスリム人口の多いインドネシアで，子どもたちが幼少期からどのように宗教的な価値を身に着けていくのか，実際に見て感じることで，研究対象となる人たちへの理解をより深めることが出来ました。インターンシップを終えてからは，修士論文作成のために東広島市の小学校で調査をしながら論文を執筆しましたが，インドネシアでの経験があったからこそ，自身の研究をより深めることが出来たと思います。

【日本文化の授業】インターンシップ先の
インドネシア教育大学にて

－この業界を選んだ理由

教育と国際交流に携わる仕事がしたいという思いで就職活動をしました。その中でも広島大学は，スーパーグローバル大学として留学生の受け入れや，日本人学生の海外への派遣等に力を入れています。自分が学生時代に培った力を活かし，大学の国際化に貢献したいと思い広島大学の職員として働くことを選びました。また職員研修の一環として，海外での研修に参加する機会等もあり，新しいことに挑戦し，成長し続けることのできる環境であるところも魅力の一つでした。

－インターンシップで得たもの・インターンシップの経験が就活に与えた影響

インドネシアのイスラーム系小学校見学

インターンシップ中は，予定していたことが思いどおり行かないことも多々ありましたが，物事に柔軟に対応する力や，周りのスタッフと協働することの大切さを学びました。これらの力は大学職員として働く中で，とても活かすことの出来る力となっていると思います。またインドネシア教育大学と広島大学は協定を結んでいます。派遣前やインターンシップ中に，現地の教職員と信頼関係を築いている広島大学の職員さんの姿を目にし，協定を結ぶ大学間の友好な関係を築いていくために，大学職員の果たす役割の大きさにも興味を持ちました。大学職員の仕事は，教員や学生をサポートするだけでなく，自らも主体的に大学の国際化に寄与することのできるとても魅力のある仕事であると，インターンシップ を通して気付くことができました。

－後輩へのアドバイス

大学院での2年間はあっとゆう間に過ぎてしまいます。現在は，コロナ禍で海外へ行くことが難しい状況にあるかと思いますが，置かれた環境の中でいま自分が出来ること，やりたいことをすべてやり切り，後悔のない学生生活を送ってください☆

世界で, 日本で活躍するOB, OG

Ayu Lana Nafisyah さん ／Junior Lecturer at Universitas Airlangga –Indonesia

2016年度　アイルランガ大学(インドネシア) 派遣　／　生物圏科学研究科(環境循環系制御学)　修了

－近況, 現在の仕事について

Holding the certificate of graduation happily in HU

I just came back from Japan last October 2020 and I am currently working as a junior lecturer in Universitas Airlangga, Surabaya-Indonesia, the host institution during my internship program in 2016. Universitas Airlangga is the public university with four campuses in total. The main campuses (Campus A, B, C) are located in Surabaya City and the latest campus (Campus D) is located in Banyuwangi City. I belong to the Department of Fish Health Management and Aquaculture at the Faculty of Fisheries and Marine (Campus C). Being a lecturer is not an easy job, especially in Indonesia, we have to carry out three pillars of higher education that we called as Tri Dharma comprising education, research, and community services. Besides doing education and research, we are targeted to contribute to the resolution of the nation's problems by directly involving in the local society.

－G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面や局面について

During my internship period in UA

I have studied in the Graduate School of Biosphere Science Hiroshima University since October 2015 until September 2020 for my Master and Doctoral degrees. I applied for the G.ecbo program during my Master study in 2016. Even though I am an Indonesian. I was allowed to stay as an intern in my own country. I experienced many things through the G.ecbo program even before dispatch to the host institution. I remember when I was taking the debating classes in IDEC as the mandatory course for the participants, I expected nothing but at the end my team won the final debate session. All of the experiences before and after dispatch to the host institution was very unforgettable and valuable.

－自分の中に残り根付いていると感じるもの, さらに発展していると感じるもの

To be honest, I did not plan to take this program seriously other than focused on my own research. But during the process, including the preparation steps, I felt another happiness in every step. I improved my communication and presentation skills here. Through this program, I could do my research in Indonesia observing microphytobenthos flora in sediments of mangrove forest. Also, through some activities with student in the host institution at that time I have gained my confidence, especially to inspire students to study abroad and to be interested in the research of microalgae that still rely on their study in Universitas Airlangga. I will never forget the opportunities and experiences that G.ecbo program afforded me at that time.

My research sampling with two diligent students of UA

－後輩へのアドバイス

Before jumping to the advice the juniors, I would like to thank especially to my supervisor during my study in Hiroshima University, Prof. Kazuhiko Koike, who supported me to join this program. And for all the hard work of all the professors and staffs who organized the G.ecbo program AY2016. My advice to anyone who is interested or is still considering to join this program, I recommend you to enjoy the whole program while also taking it seriously, especially the part of your own research (data sampling, collecting, etc.). As a student, at that time, I wanted to have some experiences out of the academic skills that may improve my attitude in the society. Here, in G.ecbo program, you will gain those experiences I mentioned, particularly if you are not an IDEC student. At first, you might think that you are the minority among many of IDEC participants, but you will find more experiences that may be important for your study and career. This time, the situation is different because of the COVID-19, I do not know how G.ecbo Program would be without dispatch of students to other countries, but I am sure G.ecbo program will make some innovation for the system.

2019年度冬期派遣生帰国報告会

今年度は帰国報告会をMicrosoftのTeamsを用いてオンラインで行いました。派遣生は「派遣国で私たちがやってきたこと」について，作成したパワーポイント資料に基づき，約20分間発表，その後の質疑応答と，英語で行いました。事前研修やインターンシップ派遣の成果が感じられる，堂々とした発表でした。Teams利用は初めての試みで，最初は運営トラブルもありましたが，ミャンマーやガーナからの学生の参加もあり，グローバルな展開の帰国報告会になりました。

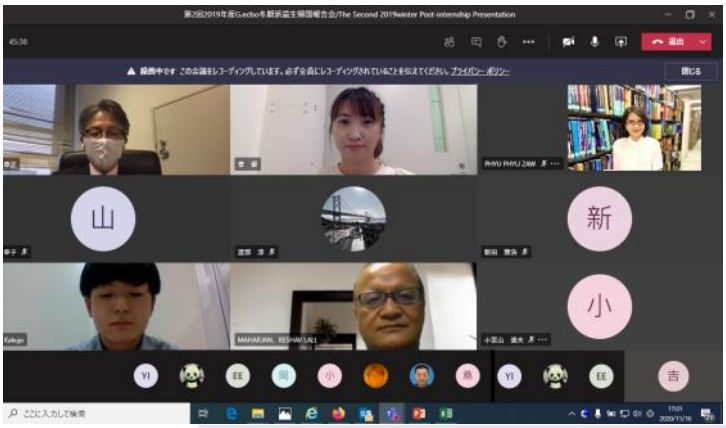
第1回

日　　時：7月6日(月)16:30～18:45
参加人数：20人
発表者:4人
① PHYU PHYU ZAW（国際協力研究科，派遣時D1）
（カリフォルニア大学サンディエゴ校マインドフルネスセンター/アメリカ）
② 大方　芳恵（国際協力研究科，派遣時M1）
（ザンビア大学人文・社会科学部文学・言語学科/ザンビア）
③ 田口　大志(国際協力研究科，派遣時M2）
（NTCインターナショナル/コートジボワール）
④ MOHAMMAD ROBIUL AWAL KHONDAKER（国際協力研究科，派遣時M2)(FORWARD Nepal/ネパール）

第2回

日　　時：11月16日(月)16:30～17:00
参加人数：19人
発表者:1人
① 角城　竜正（国際協力学科，派遣時M2）
（特定非営利活動法人IMAGINASU(イマジナス）フィリピン事務所/フィリピン）

Teamsによるオンライン帰国報告会の様子



2020年度RA(リサーチアシスタント)紹介

過去にプログラムのインターンシップに参加した学生をRAとして雇用し，会の運営，学生のサポート等，プログラムを支えています。ご活躍いただいた2人の感想です。

⇦ 写真上部右上 PHYU PHYU ZAW さん
（国際協力研究科 博士課程後期 開発科学専攻）

Thankfully, I got the chance to join the program twice, formerly as a master student, and again as a doctoral student with the research follow-up program. And now, I am working as an RA for the program. These opportunities really bring a fantastic insight for me personally and academically!

⇧ 写真上部真中　曹 蕾 さん（国際協力研究科 博士課程後期 教育文化専攻 ）

今年度，コロナ禍にありながらアメリカ，ザンビア，フィリピンなどで活動した派遣生達のオンライン帰国報告会を開催しました。振り返ってみれば，RAとして今まで積み重ねてきた研究経験を生かし，派遣生と指導教員の双方の視点から適切なアドバイスを与えることができました。これからも自らの資質向上を目指し成長し続けていきたいです。

G.ecbo ヒヤリ・ハット…!

☑体調管理

（コートジボアール）帰国直前に急激な腹痛（刺すような痛み）に見舞われる。思い当たる節がないためあくまで推測になってしまうが，①屋台のサンドイッチの具材が腐っていたこと　②油が悪かったこと③コートジボワールは辛い料理が多いため，内臓が帰国直前に辛い物の処理ができなくなって炎症を起こしてしまった，3点の可能性が考えられる。日ごろから内臓を鍛えておく，辛いものは控える，毎日サンドイッチを食べない等の予防策をとるしかない。サンドイッチ自体は，かなりの美味なため，食べないという選択肢をとる方がかえって生命を維持するうえでは危険であるので，悩ましい。

（マレーシア）移動中の体温調節がうまくできなかった。水分とミネラルを適度にとり，シャツやパーカーなどの温度調整しやすい服装を十分に用意しておくこと。また，持って行った薬が比較的優しいものであったため，一気に治すことができなかった。万が一，体調を崩しても直ぐ治せるように，強めの薬も持って行くべきだった。

☑ホテルにて

（インド）当初，ホテルの宿泊費はチェックアウト時に一括で支払う予定であったが，滞在10日目頃に10日分まで（チェックイン時からその日まで）の宿泊費を払うよう催促があった。申し出の通り10日分の宿泊費を支払った後，自室に戻ると冷蔵庫に備え付けの飲み物（有料サービス）が回収されていた。チェックアウト時に残りの宿泊日数分の宿泊費を支払おうとしたところ，10日目に回収された飲み物分の料金も請求された。その旨を派遣機関の方に相談してトラブルを解消することができた。ホテル側の情報の行き違いが原因だった。ホテル側のサービス等で疑問に思うことがあったら，早めにホテル側や派遣機関に相談する。ミニバー等の不要なサービスについては，チェックイン時に利用しない旨を断っておく必要があると感じた。

☑コロナ禍

（ネパール）新型コロナウイルス感染症蔓延の影響で，突然ネパール大使館がビザの発給停止を予告したため，急いでビザを取得し入国した。3月末までの派遣予定だったが，航空路線の欠航や減便が行われ始めたため，派遣先，指導教員，事務局に相談し，期間を短縮し帰国を1週間早めた。復路便は，足止めの可能性を避けるため，仁川をバンコク経由に変更するなど，現地での対応が必要だった。

（ザンビア）コロナの影響を受け約10日帰国を早めた。他国からの留学生は国境の閉鎖に伴い緊急で帰国命令が出たり，国際線の減便・運休が決まったり，早く自国へ帰国しなければというムードがあった。私も，在住の日本人の方々や配属先や各国の留学生から情報を得ながら，事務局，旅行社に相談し帰国便を変更した。しかしいつフライトがなくなるか分からない状況下で，帰国日が来て日本に着くまで安心できなかった。空港で足止めに遭ったり，予定便が欠航になったり，なかなか帰国ができなかった方もあり，このような予期できない事態の場合，適切な情報収集と早めの行動が必要であると痛感した。

（コートジボアール）COVID-19 の世界的な流行前の2月末，コートジボアール入国時に非接触の体温計での検温がなされた。エボラ等の熱帯熱病の流行を危険視しているためか，素早い対応に感じた。3月中頃から派遣国内でも感染者が出始め，状況を危惧した派遣元が，インターンシップの中止を決定し，帰国が1週間早まった。そこからは，飛行機が飛ばなくなると言ううわさも流れる中，メールで，帰国便の変更等，G.ecbo事務局やJICAの人材部とのやり取りを重ねた。パリを経由できない等のトラブルに見舞われた中，経由地をドバイに変更し，それに伴うホテルの確保など自ら積極的に動き，無事帰国できた。後で空港封鎖の日の出国だったと知りヒヤッとした。状況把握と素早い対応の重要性を実感した，密度の濃い2日間であった。

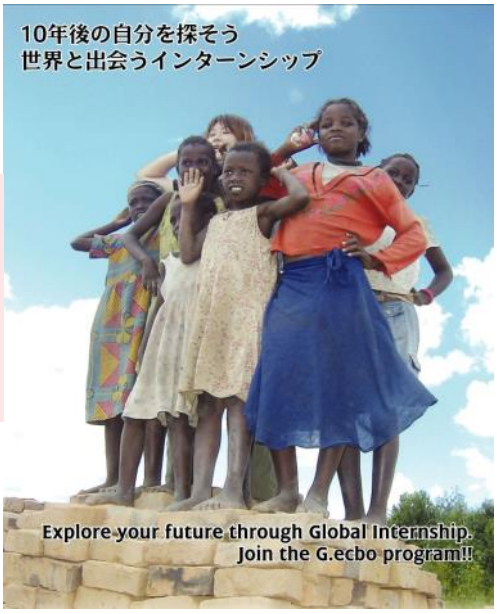
海外の派遣先で，交通事故に巻き込まれたケースがありました。その教訓は，“Please be mindful enough even when you are doing the right thing and abiding the law on the streets. And don’t hesitate to call the police whenever an accident happened.”です。躊躇なく警察を呼び，事故証明書をもらいましょう！とっさの出来事では気が動転してしまいます。しかし，その後の保険請求にも関わってきます。事前に現地の緊急電話番号を調べて，携帯電話に登録しておくことも大事ですね。

119　100　911　999　110　120

ビザ取得は時間の余裕をもって行いましょう。また，派遣国での危険レベルにおいては，帰国便の変更などを急遽行わなくてはならない場合があるため，常に外務省の危険レベルを注視し派遣先，指導教員，事務局と連絡を密にしておきましょう。

事務局編集後記

この紙面の作成に際し，多くのOB/OGにメールで連絡を取りました。掲載には至らなくても，海外からも消息を聞くことができ，世界で活躍されていることをうれしく思いました。今回は，派遣スケジュールの関係で掲載ができなかった過年度の派遣学生レポートも掲載しました。インターンシップを応援するようなハートの形の雲の写真も，見つけてみてくださいね！
2021年度の派遣情報は，G.ecboのHPで最新情報をご確認ください。（事務局）



広島大学 学生プラザ　2階
グローバルキャリアデザインセンター内
G.ecboプログラム事務局
Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo